

# 「哲学の問い、とたつた三つの選択肢」

藤野 寛



HIROSHI FUJINO

学生時代、私は哲学科に籍を置いていたが、哲学書を読んでもほとんど理解できなかった。なかなかつらくなってしまった6年間だった。そういうわけで、卒業論文では、キルケゴーの『死に至る病』一主題は『絶望』だ—をなんとか理解しようと試みた。

それが今では、哲学書を読むことが仕事であるのみならず、愉しみにすらなっている（すべての哲学書が理解できるわけではない）。同じことを30年以上続けていれば少しはものになるということなのだろうが、勉強しかしていないつまらない人生だという気もする。

代表的哲学者の一人カントが味わい深いことを言つてゐる。「人間の理性は、はねつけることもできないが、かといって答えることもできない問いによつて煩わされる」という奇妙な巡り合わせにある」と。答えが出ないのだけれど、だからといって、それなら関わりを持たずにすませたいと思つても、そうは聞屋がおろさないような問いただ。カントにとつては、例えば「世界の始まりと終わり」は時間的空間的にどうなつてゐるのか」「自然必然性以外に自由というものがあるのか」「人間の魂は永遠なのか」「神はやはり存在するのではないか」といった問い合わせの具体的例だった。

哲学も宗教も、ともに上に挙げたような答えの出そうでない問いに答えようとする試みであつて、どちらも結構しつこく問い合わせ続けるのだが、宗教の方は、その問い合わせにどこかで強引に終止符を打つ。ある解答を——必ずしも完全には納得がいかなくとも——「信じる」。不合理だけれども信じる、いや、不合理だからこそ信じるのだ。（理屈が通つていてことなら理解できるのであつて、信じる必要はない。）

宗教については、宮台真司が鮮やかな説明を与えてゐる。宗教とは、「なぜ（他の村でなく）この村が疫病や飢餓に苦しむのか」「なぜ（他の人でなく）私の頭が悪いのか」といった「世界の中の端的なもの」を受け入れ可能なものに加工するメカニズムである。どのように受け入れるのか。例えば、「それが神の意図だから」と考えることによつて。その際興味深いことに、様々な「なぜ」に対する答えとして神という観念が切り札のようを持ち出されるのだが、その切り札そのものについては——現代アメリカの哲学者トマス・ネーゲルが指摘するように——もはやそれ以上「なぜ」と問われることはない。神を信じるとは、神そのものについてはそれ以上「なぜ」とは問わないということなのだ。

それに対して、哲学は納得のいかないことは受け入れない。どこまでも疑い続ける。哲学者には嫌味な人が多いとしたものだが、それは、多くの人が受け入れている答えに疑いを差し挟んだり批判したりするからだ。その代表格が「無知の知」で有名なソクラテスで、彼はうざい蛇にたとえられ、最後は死刑になつた。カントも「すべてをぶちこわしにする人」と非難されたし、ニーチェは答えた。「疑い続ける」などと言うと、いささか英雄的に響いた。

カントの死後、二百年が経つて、問いの中には、カントの意に反してもう無関心でいられるものも出てきているのではないか。答えが出てしまつたからだ。「魂は永遠か」「神は存在するか」という問いなど、どうだろ。しかし、人が生きることには、依然として、無関心ではいられないが、しかし答えが出そうもない問いがからまりついている。「人生に意味はあるか。あるとすればどんな意味か」「良く生きるとはどういうことか」「死の事実にどう向き合えばよいのか」「幸福とはどういうあり方か」「心とは何か。そんなものが本当に存在するのか」「時間とは何か」「進歩とは何か」——例えばそういう問いだ。

ちなみに、そういう問いに答えようと試みているのは、哲学だけではない。宗教もそうだ。では、哲学と宗教の違いはどこにあるのか。宗教が「信じる」のに対して、哲学は「疑う」——それが違う。しかし、こう言つただけではあまりにぶつかりあうなので、もう少し丁寧に考えてみよう。

くが、逆に言えば、どこまでいっても答えが得られない、ということなのだ。哲学の授業をやつてると、学生諸君から「答えがないのではないか」という不満が繰り返し表明されるのだが、それは確かに、的はずれの不満なのではない。

しかし、つきつめて言えば、われわれには三つの選択肢しかないのだ。生きることに関わつて、どうしても問わずにはいられないが、しかし納得できそうもない答えしか示されていない問いに直面して

- 1：そんな問いに関わることは時間の無駄 贅沢であるとして、関わりを持たないようにする——多くの人は、とりあえずこれを選んでいるのではないか……
- 2：ある答えを、完全には納得できなくても、いや納得できないからこそ、それ以上問い合わせ続けることは断念して、信じる（ことに賭ける）
- 3：完全に納得できる答えが見つかるまで——結局見つからないかもしれない不安に耐えつつ——疑い続ける

という三つの選択肢だ。関わり合わないようにするか、信じるか、疑い続けるか。

こう書かれると、しち面倒臭そうで縁遠そうな哲学が、なんだか少しあつこよく見えてきませんか。それは、無駄、贅沢であるかもしれないものが、しかし、「切実な無駄」、「切実な贅沢」ではあるのです。

学  
び  
の  
スタンス

